

製薬会社と大学教授「果てなき癒着」

製薬大手ノバルティスファーマの高血圧治療薬「ディオバン」に関する臨床研究論文データの改ざん事件から六年が経過した。五つの大学と教授へ見返りとして、同社から奨学金や寄付金や講師謝礼の形で巨費が流れていた事実が明らかになり、黒い疑着に衝撃が走った。

製薬大手ノバルティスファーマと有志の医師たち。製薬協に加盟する七十一社を対象に、製薬業界で「C項目」と称される医師への講師謝礼や原稿執筆料などの支払い状況を調べ上げた。製薬企業の中には、社内で閲覧を許可する

四年前と変わらぬ「C項目」

厚生労働省は新法で、製薬企業から医師に資金提供される臨床研究では双方の間で契約を結び、研究資金に対する情報の公開を義務化した。日本製薬工業協会(製薬協)は「企業活動と医療機関等の関係の透明性ガイドライン」を策定し、二〇一二年度分より製薬企業から医師への支払いを開示し始めたものの、いずれも画餅の色彩が濃い。詳細な独自調査の結果、双方の癒着の基本構図は変わっていない実態が浮かび上がったのだ。

調査に基づき、一二年度と一六年度の「C項目」を比較した。一二年度の「C項目」の総額は二百四十六億円。トップは第一三共の十七億五千万円。ノバルティスファーマ(十五億六千万円)、武田薬品工業(十五億六千万円)、田辺三菱製薬(十二億九千万円)、大塚製薬(十二億二千万円)、エーザイ(十二億円)など国内外の大手が並ぶ。これに対し、一六年度のC項目の総額はなんと二百四十九億円で、一二年度とほぼ同額だ。一二年度の調査はデータが入手可能だった四十九社に限定されているとはい

だけで、テキストの形で情報を提供していない企業もあった。それでも彼らは製薬企業に向いて写真を撮り、手作業で入力した。調査は、支払い件数で総計二十二万件にも及ぶ膨大な作業だった。

田辺三菱(十一億七千万円)、武田薬品(十一億六千万円)、大塚製薬(十一億五千万円)と続く。一二年と比べて、臨床研究不正のノバルティスファーマが下がっただけで、上位陣は変わらない。同社のほか、武田薬品が二五・六%、エーザイは三九・二%、アステラス製薬が一六・五%、それぞれ減らした。

調査に基つき、一二年度と一六年度の「C項目」を比較した。一二年度の「C項目」の総額は二百四十六億円。トップは第一三共の十七億五千万円。ノバルティスファーマ(十五億六千万円)、武田薬品工業(十五億六千万円)、田辺三菱製薬(十二億九千万円)、大塚製薬(十二億二千万円)、エーザイ(十二億円)など国内外の大手が並ぶ。これに対し、一六年度のC項目の総額はなんと二百四十九億円で、一二年度とほぼ同額だ。一二年度の調査はデータが入手可能だった四十九社に限定されているとはい

え、主要製薬企業は網羅されており、実態としてC項目の総額に大きな変化はないといつてよい。中堅製薬企業社員は「当社は、医師への支払いが公開された翌年から毎年一〇%以上、講演会を減らしている」と言う。医師の間からは「製薬企業の講演会はめっきり減った」との声も漏れるが、大手製薬企業と一部の大学教授の「一体化」は揺らいでいないのだ。一六年度の資金提供額ランキングのトップ二十社は表1の通り。首位は第一三共で二十億二千万円。これに中外製薬(十一億八千万円)、

資金提供が減少した企業の共通項は、グローバル展開の加速だ。日本の製薬市場の成長率は二%。米国の七・三%はもちろん、先進国平均の六・二%も大きく下回る。さらに政府は薬価の引き下げを進めており、今後はマイナス成長が予想される。製薬企業が成長するには、市場規模が大きく、高い成長率が期待できる米国に進出せざるを得ない。そのためには新薬を開発するか、外部から調達する必要に迫られる。武田薬品がアイルランドの製薬企業シャイアーを約

田辺三菱は「キーオペニョーリダー」とされる医師に重点的にアプローチしている。同社が推すのは桑名正隆・日本医科大学アレルギー膠原病内科学大学院教授、林太智・筑波大学附属病院ひたちなか社会連携教育研究センター准教授、亀田秀人・東邦大学医療センター大橋病院内科科学講座膠原病学分野教授らだ。一六年度の講演だけでも、桑名氏は十八回で三百一十万円、林氏は二十七回で二百八十二万円、亀田氏は一五回で二百五十一万円を田辺三菱から受け取った。こうした面々が「田辺三菱の営業マン」の役割を担う。だが、あくまでも氷山の一角だ。田辺三菱は一六年度にC項目として、約十一億七千万円を支払い、全体で第三位だ。製薬企業が医師に金を払い、旧型の薬剤を処方させて割を食うのは、患者である。

表1 製薬会社による医師への資金提供額ランキング

	企業名	2016年度 (億円)	2012年度 (億円)	増減(%)* (2016/12)
1	第一三共	20.2	17.5	15.4
2	中外製薬	11.8	9.9	19.2
3	田辺三菱	11.7	12.9	-9.3
4	武田薬品	11.6	15.6	-25.6
5	大塚製薬	11.5	12.2	-5.7
6	MSD	10.7	11.8	-9.3
6	ベーリンガー	10.7	8.4	27.4
8	ファイザー	9.7	11.1	-12.6
9	小野薬品	9.2	8.7	5.7
10	協和発酵キリン	8.7	6.8	27.9
11	アステラス製薬	8.6	10.3	-16.5
12	日本イーライリリー	8.4	6.3	33.3
13	アストラゼネカ	7.9	5.9	33.9
13	ノバルティス	7.9	15.6	-49.4
15	バイエル	7.7	5.6	37.5
16	エーザイ	7.3	12.0	-39.2
17	大日本住友製薬	6.9	7.1	-2.8
18	ブリistol	6.4	2.9	120.7
19	大鵬薬品	5.3	5.4	-1.9
20	ヤンセン	4.9	4.2	16.7

*小数点第二位以下切り捨て

出典:ジャーナリズムNGO:ワセダクロニクルなどによる調査

六兆八千億円で購入する一件はその象徴である。

社を買収もままならないまま、国際競争で太刀打ちできない企業が生き残るには、既存の薬をコックツと売るしかない。日本の多くの製薬企業がこれに該当する。

ユミラの登場により、レミケードの売上高は毎年下がっているが、国内では、レミケードの売上高は六百六十八億円とヒュミラの三百七十七億円を凌駕している。この背景に見え隠れするカラクリこそ、大学教授とのもたれ合いにほかな

この業界では、画期的な新薬を開発したベンチャーが、いきなり世界的大企業に成長するものも珍しくない。一六年度に世界で最も売れた薬は、アツヴィ(米国イリノイ州)が販売するリウマチ治療薬のヒュミラで、売上高は一六一億ドル(前年度比一五%増)だ。

その代表が田辺三菱である。同社の一六年度の売上高は四千二百三十九億円。このうち二千二百三億(七六%)を国内で売り上げる。その筆頭がリウマチ治療薬のレミケードだ。世界市場では前出のヒ

第一三共も露骨だ。一二年度の十七億五千万円から一六年度には

三日に一回講演で年二千万円!!

二十億二千万円に増やした。第一三共からの支払いランキングの上

位には循環器内科専門医が名を連ねる。トップは山下武志・心臓血管研究所長で、八十一回に及ぶ講師謝金、コンサルティンク、原稿執筆それぞれ十回の対価として総額一千六百一十万円を手中に収めている。次いで奥村謙・済生会熊本病院不整脈先端治療部門最高技術顧問(二千五百九十四万円)、熊谷浩一郎・福岡山王病院ハートリズムセンター長(九百三十万円)と続いている。

第一三共は、米国子会社DSIの最大の製品である「ベニカー」(日本名オルメテック)が特許満了となり、一六年度の連結売上高は九千五百五十一億円(前年度比マインス三%)と落ち込んだ。米国内での売上減を穴埋めしたのが、増の五千百一十億円となり、武田薬品を抜いた。奮闘したのは、経口直接FXa阻害剤(抗血液凝固剤)リクシアナ、抗血小板剤エフィエントだ。

ただ、いずれも他社を圧倒する画期的な新薬とは言いがたい。リクシアナにはイグザレルト(バイエル)、エリキユース(ブリストル、

ファイザー)などの競合が存在しており、そのシェアは約二〇%で最下位である。エフィエントにもプラビックス(サノフィ)やプレタール(大塚製薬)などの先行薬が存在し、シェアは一二%にすぎないのだ。

企業べつたりの大半は内科系教授

確かに、エフィエントは、プラビックスが効かない代謝酵素が欠損している患者に有効で、日本人

首位の横手幸太郎・千葉大学教授は年間に百十二回も製薬企業の講演会をこなして、年間二千万円もの大金を懐に入れていた。

国立大学医学部教授の平均収入は一千二百万円程度。ただ、彼らの身分はみなし公務員である。診療や教育そっちのけで、製薬企業が主催する講演会にこれほど頻繁に出かけ、巨額の報酬を得ることが許されるのか。

教授たちにとつて、講演会のメリットは謝金だけではない。全国し名前が挙がった教授、本誌で製薬企業との癒着を紹介した門脇孝・東大教授(二〇一六年当時、現帝京大学常勤客員教授)や森下竜一・大阪大学教授に製薬企業は講演を依頼し、巨額の謝金を支払い続けていた。製薬企業に自浄作用は期待できない。

癒着する医師ほど順調に出世

この状況は医学界とて変わらな

い。製薬企業と癒着する医師が、順調に出世している。とりわけ東大では、その傾向が顕著だ。例えば前出の小室教授は、一六年度に製薬企業が主催する講演会の講師、コンサルティンクなどを五十九回こなし、九百二十万円を受け取っている。小室氏は一六年六月に日本循環器学会代表理事、今年四月に日本内科学会理事に就任した。

南学正臣・東大教授(腎臓内科)は、製薬企業の講演会の講師、コンサルティンク、執筆七十四回分の対価として、一千八百八万円を個人名義で受け取り、一千二百万円を奨学金寄付金として医局に入れてもらった。彼は東大病院副院長、日本腎臓学会理事、さらに新専門

の約二割が該当するが、これも決定打にはならない。さらに、プラビックスには既に後発品が出ており、市場は侵食されていく。それゆえ、第一三共が生き残っていくには手段を選ばぬ営業で、手持ちの薬を売りさばくしかない。そのために講師料や原稿執筆料で「キョービニオンリーダー」を抱き込んでいくわけだ。

を回ること、知名度が上がり、将来の学会長や理事の選挙で有利に働くこともある。カネと出世に影響するため、製薬企業との付き合いはやめられないのだ。

ただ、全ての医学部教授が、製薬企業べつたりというわけではない。

上位二十人の内訳を見ると、十七人が内科系教授。診療に忙殺される救急、産婦人科、小児科を専門とする医師はいない。

今回の調査で、製薬企業から講演を依頼されるのは、内科の中でも循環器(五人)、呼吸器(四人)、代謝・内分泌、腎臓、老年病(各二人)の専門領域となった。多数

日本老年医学会副理事長を務める傍ら、厚生省の中央社会保険医療協議会傘下である薬価算定組織の委員長も兼ねている。

薬価は製薬企業の最大の関心事だ。製薬企業のカネにまみれた医師が、この役職に不適切であることは論をまたない。これでは、癒着の枢軸に医療行政を司る厚生省が片棒を担いでいると批判されても仕方あるまい。

製薬企業と大学教授の癒着は果てしなく根深い。ノバルティスファーマの研究不正が刑事事件に発展した後、どんなに法整備をはかるうが、ガイドラインで情報開示を進めようが、事ほどさように実態は変わっていないのだ。むしろ製薬企業から医師への資金提供は、非営利法人などを介した迂回ルートを巧みに駆使することで、隠蔽されつつある。

有名無実化する規制強化の陰で、医師のモラルと患者不在の腐敗が進んでいく。

表2 主な大学所属医師の謝金受領額順位と最大受取先

医師名	所属大学	専門	合計金額(万円)	件数*	最大受取先	金額(万円)	件数*
1 横手 幸太郎	千葉大学	内科(代謝・内分泌)	2000	155	興和創薬	290	19
2 伊藤 浩	岡山大学	内科(循環器)	1915	128	第一三共	763	47
3 筒井 裕之	九州大学	内科(循環器)	1494	108	第一三共	428	29
4 室原 豊明	名古屋大学	内科(循環器)	1372	103	第一三共	164	13
5 迎 寛	長崎大学	内科(呼吸器)	1261	96	MSD	273	17
6 坂田 泰史	大阪大学	内科(循環器)	1216	88	第一三共	239	15
7 秋下 雅弘	東京大学	内科(老年病)	1141	71	第一三共	562	36
8 渡辺 彰	東北大学	内科(呼吸器)	1136	81	第一三共	356	21
9 門脇 孝	帝京大学	内科(糖尿病)	1126	83	武田薬品	256	15
10 南学 正臣	東京大学	内科(腎臓)	1108	74	協和発酵キリン	366	19

*講演会、コンサル、原稿執筆など

*講演会、コンサル、原稿執筆など

医師名	所属大学	専門	合計金額(万円)	件数*	最大受取先	金額(万円)	件数*
11 中里 信和	東北大学	脳神経外科	1080	102	大塚製薬	413	42
12 赤司 浩一	九州大学	内科(血液)	1027	71	協和発酵キリン	290	14
13 沖 英次	九州大学	消化管外科	1018	104	中外製薬	290	27
14 富田 善彦	新潟大学	泌尿器科	1005	74	ファイザー	269	14
15 中西 洋一	九州大学	内科(呼吸器)	996	100	小野薬品	249	32
16 川上 純	長崎大学	内科(リウマチ・膠原病)	921	81	小野薬品	223	17
17 小室 一成	東京大学	内科(循環器)	920	59	ベーリンガー	336	17
18 猪阪 善隆	大阪大学	内科(腎臓)	918	73	中外製薬	141	13
19 森下 竜一	大阪大学	内科(老年病)	902	43	ベーリンガー	579	26
20 河野 茂	長崎大学	内科(呼吸器・感染症)	883	84	キョーリン製薬	237	42

出典:ジャーナリズムNGO:ワセダクロニクルなどによる調査